HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コンテンツツーリズム ： メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム
Author(s)	山村, 髙淑; シートン, フィリップ
Description	本書は北海道大学出版会から2021 年に紙媒体で出版したものを、紙媒体絶版を期に、出版社の許可を得て、北海道大学観光学高等研究センターが電子版としてオープンアクセス化したものです。 本書から引用を行う場合は、書誌情報を以下のようにご記載下さい。 山村高淑, フィリップ・シートン編著・監訳, [2021] 2024, 『コンテンツツーリズムーメディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』, 北海道大学観光学高等研究センター.
Issue Date	2024-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91559
Type	book
File Information	05_Chapter 1.pdf, 個別ファイル：第１章　ジェーン・オースティンのアメリカ人ファンとコンテンツツーリズム

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

本書から引用を行う場合は、書誌情報を以下のようにご記載下さい。

山村高淑，フィリップ・シートン 編著・監訳，［2021］2024，『コンテンツツーリズム――メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』，北海道大学観光学高等研究センター.

第１章

ジェーン・オースティンのアメリカ人ファンと コンテンツツーリズム

フィリップ・シートン

イギリスは，世界でも有数の文学ツーリズム（literary tourism）大国である。ウィリアム・シェイクスピアからJ・K・ローリングに至るまで，多くの著名な作家が，一大ツーリズム現象を引き起こした作品を著している。しかし，デジタル時代においては，こうした文字によって著された作品は，同時に，映像化，マンガ化，演劇化等，多様な形で，メディアを横断してアダプテーションされ，消費者のもとに届く。そして，ファン自身も，〈プロシューマー〉，すなわち消費と同時に，二次創作，イベント，ウェブサイトや旅行記，ブログ等を生産する〈生産消費者〉として作品に関与する。このように作品のマルチユースが起こると，著者（ジェーン・オースティン＝Jane Austen），キャラクター（ハリー・ポッター），あるいは関連商品『ゲーム・オブ・スローンズ』（*Game of Thrones*）といった様々な要素が，集合体としての〈物語世界〉（narrative world）を構築し，同時にこうした要素が集合体としての〈物語世界〉を想起させる代名詞になっていく。こうした〈物語世界〉がツーリズムを誘発するとき，〈文学ツーリズム〉よりも，「ツーリズム・イマジナリー」（tourism imaginary）（Chronis 2012），「想像の場」（places of the imagination）（Reijnders 2011），あるいは「コンテンツツーリズム」（Beeton *et al*. 2013; Seaton *et al*. 2017）といった概念を用いて議論することがより相応しい。

単一のメディア形式に基づくツーリズムは確かに存在する。例えば，ニュージーランドへの〈ロード・オブ・ザ・リング・ツーリズム〉はフィルム・インデュースト・ツーリズム（film-induced tourism＝映画に誘発されたツーリズム）だし，トーマス・ハーディの小説のみを読んで，ハーディゆかりの

地へ向かうのは文学ツーリズムである。しかし，多様なメディアが溢れかえる今日の世界では，こうした純粋な例を見つけ出すのは困難である。本書の序章において，山村高淑は「コンテンツ化プロセス」を「メディアを横断したアダプテーションとツーリズム実践を通して〈物語世界〉が絶え間なく展開・拡張していくプロセス」（本書 p. 15）と定義した。

本章においては，イギリス文学史上，最も敬愛される作家の 1 人であるジェーン・オースティンを取り上げる。オースティンの原作小説が，プロのメディア制作者，アマチュアのファン双方による，多様なメディア形式でのアダプテーションを引き起こしている点を踏まえ，今日のこうしたオースティン人気が，単なる「コンバージェンス」（convergence）（Jenkins 2006）や「トランステクスチュアル・ワールド」（transtextual worlds）（Hills 2015）といった現象にとどまらないことを議論していく。イベントにおけるファン・パフォーマンス（例えば，バースのジェーン・オースティン・フェスティバル＝Jane Austen Festival で，当時を再現した衣装を着用すること等）は，コンテンツの拡張，〈オースティンの世界〉の展開を絶え間なく推し進めるうえで，中心的な役割を担っている。この意味で，現在のオースティン・ブームは，コンテンツ化プロセスの典型例と言える。オースティン関連のツーリズムは，これまで典型的には文学ツーリズムとして扱われてきたが（例：Crang 2003; Herbert 2001; Wells 2011: Chapter 4）――もちろんその初期段階においては，一義的に〈文学ツーリズム〉だった点に筆者も同意する――，1995 年，パラダイムシフトが起こる。同年を転換点として，その性質がコンテンツツーリズムへと変わったのだ。

本章ではまず，クレア・ハーマンによる著作『ジェーンの名声』[1)]（*Jane's Fame*）（Harman 2009）に基づき，ジェーン・オースティンに対する名声の変遷と，そうした名声とオースティン関連ツーリズムとの関係性について，歴史的に概観する。そして，オースティン・ファンのアメリカ人に焦点を当て，オースティン関連コンテンツツーリズムの動機について，とりわけ，イギリスを訪れるアメリカ人旅行者のより広範なイマジネーションと旅程に，オースティン関連ツーリズムがどのように適合しているのかを分析していくことで，明らかにしてみたい。

1. ジェーン・オースティンの世界への訪問――文学ツーリズムからコンテンツツーリズムへ

1817年にジェーン・オースティンがこの世を去ったとき、彼女は比較的無名だったといえる。19世紀半ばには，熱狂的な崇拝者がいくらかいたものの，「ジェイナイティズム」(Janeitism)[2)]が出現したのは，J・E・オースティン＝リーによる伝記『ジェイン・オースティンの思い出』(*A Memoir of Jane Austen*)が1870年に，続いてオースティン初の全集が1882年にそれぞれ出版された後，1880年代に入ってからのことだった(Johnson 2011: 232)。オースティンの作品は20世紀初頭の文学界で議論の対象となったが，今日の大衆化した「オースティンマニア」(Austenmania)(Todd 2015: Chapter 9)や商標としての「ジェーン・オースティン™」(Jane Austen™)(Harman 2009: Chapter 7)は，主に1990年代以降に出現したものだ。こうした今日の大衆化のきっかけとなったのは，オースティン作品の映像化である。最初に誕生したオースティン映画は，ローレンス・オリヴィエとグリア・ガーソン主演の『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*)(1940)だった。その後，オースティンの原作の台詞に忠実に依拠した，演劇的な性格のラジオドラマやテレビシリーズが制作されていくが，1995年，重要な映像化作品が3作登場する。すなわち，BBCによるテレビドラマ『高慢と偏見』，コロンビア映画社による『いつか晴れた日に』(*Sense and Sensibility*)，そしてBBCによるテレビ映画『待ち焦がれて』(*Persuasion*)だ(Sutherland 2011: 218–219)。さらに翌1996年には，『エマ』(*Emma*)が2つの形式で映像化された。つまり，オースティンの完結した小説6作品のうち4作品が，1995年から1996年にかけての2年間のうちに，映画館やテレビ向けに映像化され，リリースされたのだ(Higson 2011: 132–133)。とりわけ，『高慢と偏見』――領地ペンバリーの湖で泳いで，濡れたシャツをまとったダーシー(コリン・ファース)とエリザベス・ベネットが出会うシーンが象徴的である――は，オースティンマニアの心に火をつけたのだ。本章で主張したいことは，オースティンマニアの全体的な動向を反映して，オースティン関連のツーリズムが1995年に大きな変容を遂げたという点についてである。

1995年までは，オースティン関連の旅は，主として文学ツーリズムであった。しかし1995年以降，〈オースティンの世界〉とでも言うべきツーリズム・イマジナリーへの旅は，小説に加え，映像化作品や派生作品によって引き起こされたコンテンツツーリズムと呼ぶのが相応しい。

オースティン関連のツーリズムは19世紀にまで遡ることができる。文学ツーリズムは，オースティンの存命中にも明確に存在した現象であり，彼女の死後数十年が経過した頃には，オースティンのファンが彼女の人生に関連する場所や，小説に描かれた場所等を既に訪れていた。「1850年代の鑑賞眼のある読者らは，ウィンチェスター大聖堂――とある女性はこの大聖堂を『ジェーン・オースティンの神殿』と呼んだ――内にある愛する作者の埋葬地を探し始めた」とヘイゼル・ジョーンズは記しており，コンスタンス・ヒルとエレン・ヒルによるオースティンが暮らした場所を巡る1901年の旅についても解説している（Jones 2014: 157）。また，オースティン作品の読者らは作品の舞台地に赴くこともあった。例えば，アルフレッド・テニスン卿は，小説『説得』（*Persuasion*）の舞台地を巡るためにライム・リージスの町（Lyme Regis）――作中ではこの町でルイーザ・マズグローヴが階段から転落する場面が有名である――を1867年に訪れている（Jones 2014: 159）。こうした旅はいずれも，多様なメディアによるアダプテーションが起こるずっと前，オースティンゆかりの地が商業的に観光地化されるずっと前に行なわれたものだった。

ジェーン・オースティンの本格的な観光対象化は，ジェーン・オースティン・ハウス博物館（Jane Austen's House Museum）がチョートンに1949年に開館したことを契機に始まった。オースティンは，この家に1809年から，死の直前の1817年まで暮らし，主要作品の執筆や校正を行なっていた。ここはオースティン・ファンの巡礼において，スティーブントンにある彼女の生誕地（図1.3）や，ウィンチェスター大聖堂にある彼女の墓（図1.1）と並ぶ，重要な場所である。この博物館は観光地であると同時に，オックスフォードのボドリアン図書館（Bodleian Library）やニューヨークのモーガン図書館（Morgan Library）といったオースティンの手書き原稿や手紙といった資料を保管する施設と並び，彼女の遺品保存や研究を行なう場としても機能し



図 1.1　ウィンチェスター大聖堂のジェーン・オースティンの墓
奥のアルコーブには，ファンが記したオースティンへのメッセージが残されている。
筆者撮影。2017 年 9 月。

ている。1993年と1994年に行なわれたデイヴィッド・ハーバートの調査は，チョートンにおけるツーリズムが，文学ツーリズムの要素が強いことを示している。チョートンへの来訪者223名に対して行なったインタビューの結果，そのうち60%の回答者が，オースティンの小説を3作品以上読んでいたのだ（Herbert 2001: 322）。

学究的な消費者ではなく，カジュアルな消費者向けの，より商業的なオースティンの観光対象化は1990年代半ばから出現した。きっかけとなったのは，BBCによる1995年の『高慢と偏見』のテレビドラマ化だ。ジェーン・オースティン・ハウス博物館の来館者数は1990年代初頭には毎年約20,000人で安定していたが，『高慢と偏見』のテレビドラマ化によって「事態は一変した」（Smith 2016）。1995年には約55,000人が来館し，あまりの混雑により，時間指定制のチケットが導入されなければならないほどだった。ブームの後は，来館者数は年37,000～40,000人に戻ったものの，依然としてテレビドラマ放送前の来館者数の倍近い。その後，2009年から2017年にかけて行なわれた様々な200周年記念（1809年のオースティンのチョートンへの移住，1813年の『高慢と偏見』の出版，そして1817年の逝去）によって，来館者数は再び年50,000人に近づいた。

来訪数の伸びを見たのはジェーン・オースティン・ハウス博物館ばかりではなかった。チェシャー州にある大邸宅ライム・パークは，BBCによるドラマ化以前はオースティンと全く関係が無い場所であったが，ドラマ放送後，来訪者数が爆発的に伸びた。ライム・パークが，（主要登場人物であるダーシーの屋敷である）ペンバリーの外観のロケ地となったことから，オースティン・ファンにとって重要な旅行目的地となったのだ。来訪者の数は，ドラマ放映前の32,852人から，放映翌年の91,437人にまで，約3倍に跳ね上がった（Parry 2008: 116）。ライム・パークについては，ビジットイングランド（VisitEngland）[3]が委託した調査レポート『イギリスのフィルム及びテレビツーリズムの定量化』[4]（Quantifying Film and Television Tourism in England）においてケーススタディが行なわれている。その中で2014年8月29日に行なわれた来訪者アンケートによると（n = 193），ライム・パーク来訪者の41.3%が来訪理由に映像化作品を挙げ，そのうちの90.5%が作品名として『高慢と偏見』



図 1.2　ペンバリー / ライム・パークの有名な湖（テレビドラマ『高慢と偏見』のロケ地）に立つ筆者
写真は筆者蔵。

を回答している（Olsberg 2015: 70–72）。さらに，2015年の来訪者数は146,675人（VisitEngland n.d.）であり，ライム・パークへの来訪者数が，このドラマによって長期間にわたり大きく押し上げ続けられていることが示唆される。こうした現象は，明らかにオースティン関連のツーリズムではあるものの，文学ツーリズムと呼ぶことはできない。なぜなら――人々のイマジネーションの中で，ライム・パークがペンバリーとして固定されることにつながった――象徴的な「濡れシャツのダーシー」のシーンは，テレビドラマ版での発案・演出であり，原作の小説に全く出てこない場面だからである（図1.2）。

1995年のテレビドラマ化（テレビドラマとしてのアダプテーション）をきっかけに，オースティンに対する大衆的な人気が爆発的に高まり，新たなオースティン・ファンからの高まり続ける需要を満たすべく，オースティンの観光対象化が進展することとなった。また，1979年に設立された〈北米ジェーン･オースティン協会〉（JASNA: Jane Austen Society of North America）は，

今日では5,000名超の会員を抱え，そのウェブサイトには，1997年から会員向けに催行しているイギリスへのツアーが掲載されている（JASNA n.d.）。

一方，バースでもオースティン関連のツーリズムが発展した。オースティンは1801年から1806年にかけてバースで暮らし，この地が『ノーサンガー・アビー』（*Northanger Abbey*）と『説得』両作品の舞台ともなった。バースの町のジョージアン様式建築は，オースティンの生きた時代を彷彿させるものであり，単にオースティンの人生や小説に直接関係する場という意味を持つだけではない。1999年に開館したジェーン・オースティン・センター（Jane Austen Centre）は，単にオースティンの遺品を保存する博物館というだけでなく，彼女の人生に関する観光アトラクション的な要素も併せ持つ私営の施設である。2000年代初頭は年間40,000人程度の来館者数（Kennedy-McLuckie 2008: 55）であったが，2017年には年間150,000人に達している（Fahy 2018）。また，バースでは2001年に，初のジェーン・オースティン・フェスティバルが開催された。10日間にわたるこのフェスティバルでは，講義，公開朗読，ウォーキング・ツアー，演奏や舞台芸，衣装をまとった舞踏会等多くのイベントが催される。しかし何といってもその目玉は，摂政時代の衣装を着飾った500人程の参加者が，街の通りを練り歩く仮装行列（Regency Costumed Promenade）だ（口絵1）。

このように歴史的な衣装を「着飾る」行為は，実質的には，コスプレと同様のファン行動である（ラスタティによる第9章を参照）。また，序章で山村が述べているとおり，コスプレは，ファンが特定の場所でのパフォーマンスを通じて物語世界を再創造する行為であり，コンテンツ化プロセスを見て取ることができる重要な現象の一つである。

上述した例以外の観光地も，オースティンとつながりを持つことが有益だと考えた。『説得』の有名なシーンの舞台であるドーセット州のライム・リージスや，戦列艦ヴィクトリー（HMS Victory）が係留されているポーツマス――海軍に所属していたオースティンの兄たちは，ナポレオン戦争で戦っている――の2ヶ所が，その代表例だ。オースティンの原作を映像化した作品のロケ地を巡るためのガイドブック（Kennedy- McLuckie 2008）や，ロンドンのオースティンゆかりの地を歩くためのガイドブック（Allen 2013）等，多様なガ

イドブックが存在する。2017年のオースティン没後200周年には，イングランド銀行が，ジェーン・オースティンの肖像を描いた新しい10ポンド紙幣の発行を記念し，特別展覧会を開いた。また，オースティン生誕の地であるスティーブントンに最も近い街ベージングストークでは，常時，バースに比べて控えめなオースティン・ツーリズムというアプローチをとり，次のようなイベントを開催している。すなわち，〈ジェーンと座る〉(Sitting with Jane) と題した，街中に設置された本型のベンチ（オースティン関連の絵で飾られた，開いた本の形をした座席）をたどるイベントや，ウィリス・ミュージアム＆セインズベリー・ギャラリー（Willis Museum & Sainsbury Gallery）での展覧会，そして街の中心部におけるオースティン像の公開，等だ。2017年8月17日には，地元紙『ベージングストーク・ガゼット』(*Basingstoke Gazette*) が一面に大見出しで，「ジェーン効果：200周年を迎え，押し寄せるジェーン・オースティン・ファンが，ベージングストーク経済を大きく押し上げる」と報じている。また，その後のイングランド南東広域観光局（Tourism South East）の推計によれば，一連のジェーン・オースティン没後200周年記念事業によって，ハンプシャー州に2,100万ポンドの経済効果があったとのことである（Jane Austen 200 2018）。

こうしたオースティンにまつわる様々なツーリズム現象が生じている現代の状況は，もはや文学ツーリズムの範疇に収まるものではなく，ミクスト・メディア（mixed media）型ツーリズム，すなわち，コンテンツツーリズムとして理解すべき状況である。なお表1.1は，現代のオースティン関連コンテンツツーリズムの目的地を整理したものである。

2. イギリスにおけるオースティン・ファンのアメリカ人

今日のオースティンのファンは実にグローバルだ。ジェーン・オースティン・ハウス博物館のマーケティング部長マデライン・スミス（Madelaine Smith）は，ゲストブックに記されたコメントから判断する限り，まだ来館者が来ていない国はたった3ヶ国だけである，と2016年に語っている（Smith

表 1.1　オースティン関連のコンテンツツーリズム目的地

カテゴリー	説明	例
オースティンの人生に関係する場所	生誕地	ハンプシャー州スティーブントン
	家	チョートンのジェーン・オースティン・ハウス博物館，バースで暮らした家
	ゆかりの地	オックスフォード（兄たちが暮らし，オースティンが学校教育を受けた地）
	死	ウィンチェスター大聖堂の墓
オースティン時代の場所	摂政時代の建築	バース，ロンドン
	ナポレオン戦争関連の地	ポーツマス，戦列艦ヴィクトリー（HMS Victory）
	イングランドの田舎	ハンプシャー州の田園地帯
	カントリー・ハウス	ナショナル・トラスト（National Trust）の物件
小説の舞台	実在：小説に描かれた実在の場所	バース＝『ノーサンガー・アビー』，ライム・リージス＝『説得』，ボックス・ヒル＝『エマ』
	架空：小説中の架空の場所についての着想をオースティンに与えたと考えられている場所	チャッツワース・ハウス（Chatsworth House）とケドレストン・ホール（Kedleston Hall）（ペンバリーの着想をオースティンに与えたと考えられている）
映像化作品のロケ地	映像化作品が撮影された場所	レイコックとライム・パーク＝ BBC のテレビシリーズ『高慢と偏見』
スピンオフ作品の舞台地・ロケ地	スピンオフ小説や映画に関連する場所	ウェスト・ワイクーム・パーク（West Wycombe Park）＝『オースティンランド 恋するテーマパーク』（*Austenland*），バジルドン・パーク（Basildon Park）＝『高慢と偏見とゾンビ』（*Pride and Prejudice and Zombies*）
オースティン関連のモニュメント	像	ベージングストークのオースティン像
	オースティン関連の物品を所蔵する図書館	大英図書館，ボドリアン図書館，モーガン図書館
	展覧会（企画展）	イングランド銀行（2017）
	観光施設	バースのジェーン・オースティン・センター
イベント	フェスティバル	バースのジェーン・オースティン・フェスティバル
	パフォーマンス	ミュージカル・ジェーン・オースティン（Jane Austen the Musical）
	会議・集会	北米ジェーン・オースティン協会の会合

2016)。なお，グローバルなファンダムの中で，アメリカ合衆国（以下，アメリカ）は特に重要な位置を占めている。ハーバートが実施した1993年から1994年にかけての調査によると，ジェーン・オースティン・ハウス博物館の来館者は，イギリス国民に次いで，アメリカ人が最も多かった（Herbert 2001: 321）。また，北米ジェーン・オースティン協会（JASNA）は世界最大のジェーン・オースティン・ファンの組織であり，研究論文，二次創作作品，そして旅行記の多くが，アメリカから発信されている。

本セクションでは，オースティン・ファンのアメリカ人によるコンテンツツーリズムに焦点を当てる。その前にまず，オースティンはなぜそれほどアメリカ人の心に広く訴えるのか，見ていきたい。初めてアメリカで出版されたオースティンの小説は，無断で複製され1816年に公表された『エマ』だった。それからその他の5作品も，1832年から1833年にオースティンの全集の一部として出版された（Wells 2017: 25–27）。その後，19世紀のアメリカでは，オースティンの人気が徐々に高まり，崇拝者も現れるが，一方で批判的な者（マーク・トウェイン等）も多くいた。

メアリー・ファヴレが指摘したとおり，アメリカにおけるオースティンのその後の人気には，やや皮肉な面がある。

> オースティンの生きた1775年から1817年は，イギリスからのアメリカの独立と，国家としてのアメリカのアイデンティティを築くための奮闘と，ほぼ同時期だ（中略）。オースティンの生涯にわたって，敵対する両国の間で戦争が二度繰り広げられたが，後者では海軍士官だった兄弟の1人が巻き込まれる可能性があった。オースティンの小説は，アメリカ人が激しく拒否した，当時のイギリスの政治システムの価値観を体現していると言った方が良いかもしれない。（Favret 2000: 166–167）

しかし，オースティン文学のアメリカの支持者は，彼女の小説が持つ現代性，すなわちオースティンの「時代に先駆けた」感性を高く評価し，さらには「上流社会の傲慢に対する反抗」を作品の中に見出した[5)]。ファヴレは，オースティンの人気の根源が，究極的には「自由と幸福の追求」にあると主

張している（Favret 2000: 168–178）。したがって，今日の親英主義の流れやオースティン巡礼が出現する以前のアメリカにおけるオースティンへの支持というのは，文学的な理解と，アメリカ人としての自己認識に根差していたといえるだろう。アメリカにおける今日的なオースティンの人気は，様々な要因に基づいている。外国でありながらも馴染みのある，理想化されたイギリスの田園風景への憧れ。古き良きイギリスに対するノスタルジックなまなざし（これは，アメリカ人が家族のルーツを〈旧世界〉までたどるのを好むことにしばしば由来する）。時代に先立つクールなフェミニストとしてのオースティンのイメージ。トートバッグを飾ったり，この不確実な時代において金言となったりする，その機知に富んだ言葉。リアルな対話を通じて人物像を作り上げていく技術をマスターした，人を惹きつける物語の著者としてのオースティンの純粋な文学的評価。そして，最高の魅力を持つ究極のイギリス人男性，ダーシーと出会えるというファンタジー（俳優コリン・ファースの姿でイメージされた場合はなおのこと）を読者に与えた作家として。クラウディア・ジョンソン（Johnson 2011: 245）は，「ジェーン」は「彼らの」，「あなたの」，そして「私たちの」ものであると結論付けている。換言するならば，オースティンの世界は，本格的な文学批評家から，『ブリジット・ジョーンズの日記』（*Bridget Jones's Diary*）のようなスピンオフ小説・映画のファンに至るまで，全ての人に何かを与え得るのだ。

結局のところ，イギリスのオースティンゆかりの地を訪れるアメリカ人旅行者には，旅を通じてオースティンとのつながりを深めたいという，複雑で個人的な理由がそれぞれにあると言える。イギリス訪問の決定に当たり，オースティンの要素が占める相対的な比重もまた人によって大きく異なる。最も比重が大きい場合というのは，オースティン巡礼の場合であろう。この場合，オースティンゆかりの地を巡ることが，イギリスを訪れるうえでの一番，あるいは唯一の動機となっている。典型的な巡礼は北米ジェーン・オースティン協会（JASNA）が主催するツアーだ。ツアーは7月に開催され，通常，オースティンの命日7月18日に行なわれる，ウィンチェスター大聖堂の墓所でのセレモニーが含まれる。2011年にJASNAのツアーに参加したデボラ・ヨッフェはその著書*Among the Janeites*で，そのときの経験を

記した。参加者の詳細な人物描写を通じて，ヨッフェはそれぞれのオースティンとのつながりを紹介している。幼少期からの小説の熱心な読者，摂政時代に関するウェブサイトの管理人，そして，ある日『高慢と偏見』とコリン・ファース演じるダーシーに出会った50歳の人物（Yaffe 2013: 20–23）。ヨッフェはまた，ジェイナイト（Janeite）[6] の人口統計的データについても記している。「我々32名は，非常に同質な集団だ。全員白人，全員アメリカ人，大多数が女性，大多数が中年である。多くが，現役あるいは退職した専門職だ（中略）。4人の男性参加者は，ジェイナイトであるパートナーの忠実なエスコート役を果たしている」（Yaffe 2013: 19–20）。雑誌*Jane Austen's Regency World*に掲載されたツアーレポートの集合写真から判断すると，こうした人口構成は2017年のツアーに参加した52名についても同じことが言える（Cooper *et al.* 2017: 55）。JASNAツアーの紀行文からわかることは，作家に直接ゆかりのあるチョートンやウィンチェスター大聖堂は特別な重要性を持つものの，文学ゆかりの場所と同様に，ロケ地もまた旅程の中の目玉になっている，という点だ。さらに，似た好みを共有する参加者たちの間の仲間意識が，こうした旅を楽しむうえでの鍵である。

グループ旅行に加えて，単独の巡礼も存在する。自己探究のための旅であると同時に，オースティンとの想像上のつながり，あるいは現実世界での自分だけのダーシー（的）候補者との出会いといった，個人的なつながりを育むための旅である。こうした旅の紀行文は，ブログや，ソーシャルメディア上のプライベートなフィードで目にすることができるが，出版もされている。ロリ・スミスによる*A Walk with Jane Austen*（2007）では，巡礼の一例が描かれている。スミスが同書に記したのは，スピリチュアルな旅路（これは彼女の信仰と，消耗性疾患を克服した経験の両面に関連している），自分のダーシー探し，そして1ヶ月にわたるオースティンゆかりの地を巡る旅行記だ。JASNAの旅同様，旅程は文学ツーリズムに限定される内容ではなく，オースティンの世界の様々なゆかりの地（表1.1）を訪れるコンテンツツーリズムであったことを明確に示している。またスミスの記述は，一部のファンにとって，オースティンが思慮に富んだカウンセラーのような存在であることを示す顕著な例でもある。同書全体から，オースティン作品が聖書に匹敵

する，スミスの〈人生のバイブル〉になっていることがわかる。

私的なオースティン巡礼の旅は，シャノン・ヘイルの2007年の小説*Austenland*のテーマとしても取り上げられており，2013年には映画化された。このストーリーでは，ジェーン･ヘイズ――コリン･ファース演じるダーシーに夢中な30代アメリカ人女性――が，ロマンスを求めて，イギリスにあるオースティンがテーマのリゾート地を訪れる。この映画は，主人公がコンテンツツーリストとしてイギリスを訪れることから，コンテンツツーリズムに関するストーリーである。それと同時に，映画のロケ地ウェスト・ワイクーム・パーク（West Wycombe Park）がコンテンツツーリズムを生み出すストーリーでもあるのだ（コンテンツツーリズムを扱った映画が，新たなコンテンツツーリズムを生み出す例については，第10章の『アンニョン！君の名は』（*Hello Stranger*）の例を参照）。ウェスト・ワイクーム・パークでは，BBCのドラマ『高慢と偏見』（2008）と，マッシュアップ作品『高慢と偏見とゾンビ』（2013）も撮影されている。こうした作品群は，再編集された作品群というだけでなく，ツーリズムによってオースティンの物語世界を拡張する役割を担っており，〈コンテンツ化プロセス〉の重要な一部となっている。さらに，劇中の場面と現実の場所とのかかわりを解明することで，ファンの旅の楽しみはさらに広がっていく。つまり，ファンは原作（小説）だけでなく，そこから，オースティンに関する多様なコンテンツへと，楽しみを広げていっているのだ。

以上で述べてきた巡礼の事例については，その旅について記された出版物から詳細を窺い知ることができるが，いずれもオースティン関連の場所を巡ることが国外旅行に出るうえでの第一義的な動機であった点は共通していた。しかし，より多くの旅行者は，一般的なイギリス旅行の一部として，オースティンゆかりの地への訪問を組み入れているのが実態である。こうした旅行者は，オースティン関連の観光地巡りのためには1～2日費やす程度で，残りの滞在期間には他のことを行なう。このカテゴリーに分類される旅行者の経験を探るため，私は，Hidden Britain Toursのフィル・ホウ（Phil Howe）に協力を仰ぎ，彼が2017年に催行したジェーン・オースティン・ツアーの参加者にアンケートを配布した[7)]。この個人ツアーでは，1日または半日かけ

て，ベージングストークから，ハンプシャー州の田園地帯のオースティンの生誕地（図1.3），オースティンの父が教区牧師を務めたスティーブントンの教会，ジェーン・オースティン・ハウス博物館，チョートン・ハウス図書館（Chawton House Library），そしてジェーンの姉カサンドラの墓を訪れる。アンケートについては，13人の参加者からメールで回答を得ることができた。回答者は全員女性で，イギリス国外からの旅行者だった。11名はアメリカ人で，残りの2名はオーストラリアとトルコから参加していた。年代は20代から70代までで，60代の回答者が5名と最も多かった。サンプル数としては大きくないものの，回答者からはそれぞれ，A4用紙にいっぱいあるいは複数枚にわたる，詳細な回答が得られたことから，こうしたファンとその旅についての見識を深めることができた。

回答者のうち9名は，オースティンの小説との最初の出会いは10代の頃だったと述べた。そのうち何人かは当時即座に，終生のファンになった――「高校時代に本を読んで以来のジェーン・オースティンのファンです」（回答者L，70代）――が，残る何人かは後年になってから関心を深めたという。回答者C（50代）の場合，ツアーに参加する前年にKindleで読んだ無料版の『エマ』が初めてのオースティン作品だった。一方，オースティンとの出会いが，映像化作品やスピンオフ作品だった回答者もいた。回答者F（60代）は「エマ・トンプソンの映画『いつか晴れた日に』が公開された1990年代からオースティンの作品を読むようになった」と述べた。そして，50代の回答者Jは次のように説明した。

> 高校時代はジェーン・オースティンにはほとんど触れたことがありませんでした。『ブリジット・ジョーンズの日記』の小説・映画の人気を受けて，大人になってから，ジェーン・オースティンを再発見したのです。この作品は，『高慢と偏見』の現代的なアダプテーションだったばかりでなく，著者自身がコリン・ファース版のテレビドラマ『高慢と偏見』[8]について本の中ではっきりと触れていたのです。これをきっかけに私はそのテレビドラマを見たのです。それが『高慢と偏見』の原作と私の再会に繋がりました（なぜなら，このテレビドラマシリーズは原作に比較



図 1.3　ジェーン・オースティンの生誕地
写真右手奥がジェーン・オースティンの生家。イギリス文学界において最も重要な作家の生誕地の一つであるこの場所は，原野にひっそりと残されており，地元コミュニティによって過度な観光地化から守られている。筆者撮影。

> 的忠実なアダプテーションだったためです)。結果として，私はその他のジェーン･オースティン作品も読むようになり，様々なジェーン･オースティン映画や，ストーリーの現代的なアダプテーションを探すようになりました。今では，ボリウッド作品からイギリス作品，オリジナル・バージョンからモダン･バージョンに至るまで，あらゆるジェーン･オースティン映画をコレクションしています。

オースティン・ファンである理由について，回答者たちは様々な理由を挙げた。主だった5つの理由は次のとおりだ: (a) 深みのある人物像・人間関係，真実味のある筋書き，(b) オースティンの女性としての視点(「何世紀隔てていても，ジェーン･オースティンは女性の心からの言葉を紡いでいます」，回答者F，50代)，(c) ハッピーエンドのラブストーリー，(d) オースティン

自身，あるいはキャラクターが持つ機知（「一番好きなのはエリザベス・ベネットです。賢くて，機知に富んで，自信たっぷり。そんなヒロインと小説の中で出会えるのは最高です」，回答者I，40代），そして（e）口汚い罵り，セックス，暴力が無いこと（「今日の文化では見出すのが難しい，清らかできちんとしたラブストーリー」，回答者M，30代）。

こうして見てみると，いずれの回答者も，オースティンに対する情熱と，ゆかりの地への個人ツアーに有料でも参加したいという意欲，の双方を共有していたと言える。ただし，イギリス滞在中の目的地が，オースティンゆかりの地ばかりだったわけではない。回答者のうち5名は，ツアーに参加すること自体が，イギリスへの旅における最優先事項だったと回答した。例えば回答者Mは次のとおり述べている。

> 私たちの（アメリカからの）イギリス旅行は，母の60歳の誕生日を祝うためでした。母はジェーン・オースティンの大ファンなので，このツアーに参加しました。母がイギリスでやりたいことのリストの中で，ツアーへの参加はトップ項目の一つでした。

ツアー参加の優先度を，高，あるいは中程度，とした回答者（なお，優先度が低と回答した者はいなかった）であっても，今回の海外旅行の主たる目的としては，家庭の理由や，他の目的地を挙げていた。例えば回答者Lの回答は次のとおりだった。

> イタリアで家族と会うため，その前に時差ボケを治そうとイギリスに短期滞在しました。私にとってはツアー参加の優先度は高く，実際のところ，それが，直接イタリアに向かうのではなくイギリスに立ち寄ることにした理由です。

そして回答者Gはこう述べている。

> 夫が，ロンドンで開かれる3回のエリック・クラプトンのコンサートの

> チケットを全回分持っており，もう何年もロンドンを訪れていなかったので自分もついていくことにしました。田園地帯への旅自体の優先度は中程度で，オースティンはおまけでした。結果的には，今回の旅行で最も良い経験の一つになりました。

回答の中では，旅のパートナーの存在についてしばしば述べられている。こうした旅のグループやカップルについては，その構成員の中に，オースティンゆかりの地を訪れることに強い動機を持っていた人が，少なくとも1人いたことが示されており，他のメンバーは単に「ついてきた」だけの場合が多いようであった。回答者Fは，「旅のパートナーである妹は，ジェーン・オースティンの本を読んだことがなく，映画を1つ観たかもしれない程度だったので，ツアー参加の優先度は中程度でした。興味を持っていたのは私で，妹は私の好きなようにさせてくれたのです」と回答している。

過去と将来の旅に関する回答からは，ジェーン・オースティンのような一連のコンテンツが，イギリス再訪を促す働きを持つことも示された。回答者13名のうち，5名は以前にもイギリスのオースティンゆかりの地を訪れたことがあった。そしてこの5名全員がバースを訪れた経験があった。1名はチョートン，ウィンチェスターにも行ったことがあり（したがって，ジェーン・オースティン・ツアーへの参加により，チョートン自体を訪れるのは二度目），1名はライム・パークとチャッツワース・ハウス（Chatsworth House）のロケ地も訪問したことがあった。回答者のうち2名は，イギリス国内のゆかりの地を訪れたことはなかったが，アメリカでオースティンのイベントに参加したことがあると述べた。多くの回答者が，イギリス再訪を希望したが，イギリスを訪れるうえでの費用面の問題もあり，再訪の計画は具体的というよりは希望的なものだった。

最後に，回答内容からは，コンテンツツーリストにとってイギリスが，魅力的な目的地に富んだ国であることが示された。この意味では，第2章においてマリー・タインとグレッチェン・ラーセンが提案したコンセプト「コンテンツ・ブランドスケープ」（contents brandscape）（特に第2章図2.1を参照）としてイギリス全体を捉えることが可能だと考えられる。すなわち，同じ空間に

存在する他の複数の魅力的なコンテンツの存在によって，もともと魅力的だった目的地に，さらに豊かな物語性が付加されていく，ということだ。例えば，20代の回答者Eは，3種類のコンテンツに焦点を当てたイギリス旅行についての，詳細な説明を記している。

> イギリス滞在中は，ロンドンで8日間，バースで3日間過ごしました。ジェーン・オースティンについては，彼女が埋葬されたウィンチェスター大聖堂を訪れるためウィンチェスターと，彼女が亡くなったコレッジ・ストリート8番（8 College Street）を訪れました。彼女の長いコート（Pelisse），肖像画，そして小説の初版を展示するウィンチェスター・ディスカバリー・センター（Winchester Discovery Centre）に行きました。バースにも赴きました。ジェーン・オースティン・センターを訪れ，街中を歩くジェーン・オースティンのウォーキング・ツアーに参加しました。また，ジェーンが参加した公式の舞踏会が開かれたアッセンブリー・ルーム（Assembly Rooms）を訪問し，そして彼女が暮らしたシドニー・プレイス4番（4 Sydney Place）を見てきました。1800年代初頭にジェーンが散歩した，シドニー・ガーデン（Sydney Gardens）も歩いて回りました。イギリス滞在中に，ジェーン・オースティンゆかりの地を訪問することの優先度は高いものでしたが，最優先ではありませんでした。なぜなら私は，ロンドンのハリー・ポッターゆかりの地――舞台演劇『ハリー・ポッターと呪いの子』（*Harry Potter and the Cursed Child*），キングス・クロス駅とプラットフォーム9¾，ワーナー・ブラザーズ・スタジオ・ツアー・ロンドン，そしてハリー・ポッターのロケ地――も訪れていたためです。イギリス滞在中に，『ダウントン・アビー』（*Downton Abbey*）のハイクレア・カースル[9]やロンドンの観光地を見学することと並んで，ジェーン・オースティンとハリー・ポッターゆかりの地を訪問することの優先度も高いものだったのです。

ジェーン・オースティン・ツアーのガイド，フィル・ホウによると（Howe 2018），ツアー参加者の多くは，ジェーン・オースティンと並んで，チャー

ルズ・ディケンズ，ブロンテ姉妹，ビアトリクス・ポター，そして（とりわけ若い家族は）ハリー・ポッターにも興味を示すことが多いという。オースティン・ツーリズムは，人気の小説，映像化作品，興味深い物語世界，そして訪問可能な様々な（そして，それぞれに魅力的な）ゆかりの地，といった要素によって魅力的なものになっている。そしてハリー・ポッター・ツーリズムも同様に，そうした要素によって，イギリス国外からの旅行者を魅了するコンテンツツーリズムとなり得ているのである。この点については，本書の終章において再び取り上げてみたい。

3. 結論

本章では，1995年がオースティン関連ツーリズムの転機となったことを示した。BBCによる『高慢と偏見』のテレビドラマとしてのアダプテーションに加え，2つの大規模な映像化作品が，ジェーン・オースティンに対する幅広い関心を爆発的に高め，ゆかりの地（ジェーン・オースティン・ハウス博物館とライム・パーク）への入込客数の明確な増加，それに続く新たな観光地（ジェーン・オースティン・センター），イベント（バースのジェーン・オースティン・フェスティバル）や観光商品（JASNA主催のツアーとJane Austen Tour[10]）の開発へとつながった。映像化作品がオースティンの世界に与える影響が高まるにしたがって，オースティン関連ツーリズムを文学ツーリズムとして語るのは適当ではなくなってきた。スピンオフ小説はさらなるコンテンツ化プロセスを促進し，『オースティンランド　恋するテーマパーク』，『高慢と偏見とゾンビ』，『高慢と偏見，そして殺人』（*Death Comes to Pemberley*）といった映像化作品が生まれていく。そしてそうした新たな映像化作品が，過去の映像化作品――それらはより原作に忠実なものなのだが――と結びついていた場所，既存のオースティン・ツーリズムの目的地への新たなツーリズムを生み出していく。こうしたコンテンツ化プロセスを促進するのは文学ファンというより，むしろ，オースティン関連のものは手当り次第食してしまう「オースティン雑食動物」（Austen omnivores）（Wells 2011:

Chapter 2）や，知識を得ることではなく楽しさを享受することを一番の目的とする「アマチュア読者」（Wells 2011: Chapter 3）である。こうしたファンが，今日のオースティン産業を商業的に支えているファンである。またさらに，ファン活動と広がり続ける〈オースティンの世界〉においては，ツーリズムがその中心にあると言えよう。

現在のオースティン・ブームにおけるアメリカの役割は大きい。多くの映像化作品はアメリカで制作されているか，アメリカからの資金面のバックアップがあるからだ。さらに，オースティンゆかりの地を訪れる海外からの旅行者の多くはアメリカ人である。また同時に，アンケートへのこうしたアメリカ人旅行者による回答や，彼・彼女らの旅行体験記からは，多種多様な関心を持ってイギリス旅行に臨んでいること，そして巡礼の旅を行なった旅行者でさえも，他の動機があり得ることが明らかとなった。JASNAのグループ・ツアーでは，好みの似た旅仲間との交友が明らかに重要であった。しかし，オースティンゆかりの地へ，他者に〈くっついて来た〉人も多い。こうした人々は，一見コンテンツツーリストに見えるものの，実際は旅のパートナーとの関係を維持することを動機として持っており，必ずしもコンテンツとの関係を深化させることを目的としていない。

Hidden Britain Toursでのアンケートからは，ツアー参加者の多くは，より一般的な，ごく普通のツーリスト体験の一つとして，コンテンツツーリズムに関心を持っていることもわかった。言い換えると，多様なポピュラーカルチャー作品によって物語性や重要性が高まった場所への訪問を楽しんでいるのだ。こうした旅行者は複数のコンテンツを楽しんでいるため，アンケートに回答したジェーン・オースティン・ファンも，次の渡英の機会には，オースティンに関する物語世界でのツーリスト体験に限定せず，トーマス・ハーディやハリー・ポッターゆかりの地も訪れたいと述べていた。こうした志向を持つコンテンツツーリストは，特定のコンテンツ（著者，キャラクター，あるいは関連商品等）のファンというより，現在のツーリスト体験と，メディア文化の消費がもたらす娯楽とを結び付ける――それは過去から未来まで多様な消費を含む――という，特定のツーリスト体験スタイルのファンなのである。

二次創作，多様なメディアでのアダプテーション，そして作品の再解釈――原作に忠実であれマッシュアップであれ，あるいは学究的であれ純粋に娯楽的であれ――が増加することによって，ジェーン・オースティンに基づく物語世界がさらに拡張されていくと，オースティン関連の旅の持つ意味や姿は，さらに多様化していくと考えられる。したがって，オースティン関連ツーリズムは，伝統的な狭義の文学ツーリズムから，より複雑で多面的なコンテンツツーリズムへと，これからも変化し続けていくことになるだろう。

注

1）編者補注：日本語タイトルは編者の訳による。
2）編者補注：Janeite は〈オースティンの信奉者〉の意で，ジェーン・オースティンならびに彼女にかかわるあらゆる要素に対する熱狂的な崇拝者を指す語として使用される。
3）編者補注：イングランド観光局。
4）編者補注：日本語タイトルは編者の訳による。
5）ここで Favret (2000: 184, n. 14) は，1900 年に出版された *Harper's Bazaar* における William Dean Howells の言葉を引用している。
6）注 2）参照。
7）筆者は，2016 年 9 月 6 日に，Hidden Britain Tours に参加した。フィル・ホウによる，研究プロジェクトへの支援，ツアー客へのアンケートの配布，そして本章の初稿に対する有益なコメントに大変感謝している。また，アンケートに詳細な情報を記入して下さった回答者の方々にも謝意を表したい。
8）編者補注：1995 年 BBC 放送のテレビドラマ版を指す。
9）編者補注：Highclere Castle．ハンプシャーにある 17 世紀建造のカントリー・ハウス。
10）*A Walk with Jane Austen* の中でロリ・スミスは，2006 年に，当時 Jane Austen Tour を企画中だったフィル・ホウと出会ったことを記している（Smith 2007: 102）。

参考文献

Allen, L. (2013) *Walking Jane Austen's London: A Tour Guide for the Modern Traveller.* Oxford: Shire.

Beeton, S., Yamamura, T. and Seaton, P. (2013) The mediatisation of culture: Japanese contents tourism and popular culture. In J.A. Lester and C. Scarles (eds) *Mediating the Tourist Experience: From Brochures to Virtual Encounters* (pp. 139–154). Farnham: Ashgate.

Chronis, A. (2012) Between place and story: Gettysburg as tourism imaginary. *Annals of Tourism Research* 39 (4), 1797–1816.

Cooper, L.P., Rosowicz, J. and Moss, C.M. (2017) Touring with Jane. *Jane Austen's Regency*

World November/December, 54–55.

Crang, M. (2003) Placing Jane Austen, displacing England: Touring between book, history and nation. In S.R. Pucci and J. Thompson (eds) *Jane Austen and Co.: Remaking the Past in Contemporary Culture* (pp. 111–130). New York: State University of New York Press.

Fahy, V. (2018) Personal correspondence with Victoria Fahy (Visitor Experience Manager, Jane Austen Centre, Bath), 6 June.

Favret, M.A. (2000) Free and happy: Jane Austen in America. In D. Lynch (ed.) *Janeites: Austen's Disciples and Devotees* (pp. 166–187). Princeton, NJ: Princeton University Press.

Hale, S. (2007) *Austenland*. New York: Bloomsbury.

Harman, C. (2009) *Jane's Fame: How Jane Austen Conquered the World*. New York: Picador.

Herbert, D. (2001) Literary places, tourism and the heritage experience. *Annals of Tourism Research* 28 (2), 312–333.

Higson, A. (2011) *Film England: Culturally English Filmmaking since the 1990s*. London: I.B. Tauris.

Hills, M. (2015) From 'Multiverse' to 'Abramsverse': Blade Runner, Star Trek, multiplicity, and the authorizing of Cult/SF worlds. In J.P. Telotte and G. Duchovnay (eds) *Science Fiction Double Feature: The Science Fiction Film as Cult Text* (pp. 21–37). Liverpool: Liverpool University Press.

Howe, P. (2018) Personal correspondence with Phil Howe (Hidden Britain Tours), 29 June.

Jane Austen 200 (2018) The Jane effect: Jane Austen 200 gives Hampshire a £21 million boost. See http://janeausten200.co.uk/jane-effect-jane-austen-200-gives-hampshire-£21-million-boost (accessed June 2018).

JASNA (n.d.) Tours of England. See http://www.jasna.org/conferences-events/tour/ (accessed June 2018).

Jenkins, H. (2006) *Convergence Culture: Where Old and New Media Collide.* New York: New York University Press.

Johnson, C.L. (2011) Austen cults and cultures. In E. Copeland and J. McMaster (eds) *The Cambridge Companion to Jane Austen* (2nd edn) (pp. 232–247). Cambridge: Cambridge University Press.

Jones, H. (2014) *Jane Austen's Journeys*. London: Robert Hale.

Kennedy-McLuckie, M. (2008) *Jane Austen: TV & Film Locations Guide.* Durham, UK: Trail.

Olsberg SPI (2015) Quantifying Film and Television Tourism in England. See http://applications.creativeengland.co.uk/assets/public/resource/140.pdf (accessed June 2018).

Parry, S. (2008) The Pemberley effect: Austen's legacy to the historic house industry. *Persuasions* 30, 113–122.

Reijnders, S. (2011) *Places of the Imagination: Media, Tourism, Culture*. Farnham: Ashgate.

Seaton, P., Yamamura, T., Sugawa-Shimada, A. and Jang, K. (2017) *Contents Tourism in Japan: Pilgrimages to 'Sacred Sites' of Popular Culture*. New York: Cambria Press.

Smith, L. (2007) *A Walk with Jane Austen*. Colorado Springs, CO: Lion.

Smith, M. (2016) Interview conducted by the author at Jane Austen House Museum, 6 September.

Sutherland, K. (2011) Jane Austen on screen. In E. Copeland and J. McMaster (eds) *The Cambridge Companion to Jane Austen* (2nd edn) (pp. 215–231). Cambridge: Cambridge University Press.

Todd, J. (2015) *The Cambridge Introduction to Jane Austen*. Cambridge: Cambridge University Press.

VisitEngland (n.d.) Most visited paid attractions - North West 2015. See https://www.visitbritain.org/sites/default/files/vb-corporate/Documents-Library/documents/England-documents/most_visited_paid_north_west_2015b.pdf (accessed May 2018).

Wells, J. (2011) *Everybody's Jane: Austen in the Popular Imagination*. London: Bloomsbury.

Wells, J. (2017). Austen in America. *Jane Austen's Regency World*. November/December, 24–29.

Yaffe, D. (2013). *Among the Janeites: A Journey Through the World of Jane Austen Fandom.* Boston, MA: Mariner Books.